

特集3

在日ブラジル人児童のための漢字・算数教材を ウェブサイトで無償提供

東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターの
「在日ブラジル人児童むけ教材開発プロジェクト」

「国際人流」編集局

産学民の連携が始まった
教材づくりのプロジェクト

東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターは、さまざまな言語や文化的背景を持った外国人が多く住むようになった日本社会が直面する課題を解決するために、「教育」「研究」「社会連携」の三分野で活動していくことを目的に、昨年四月設立された。

「在日ブラジル人児童むけ教材開発プロジェクト」は、その活動の一環として進行している三井物産株式会社との産学連携プロジェクトである。

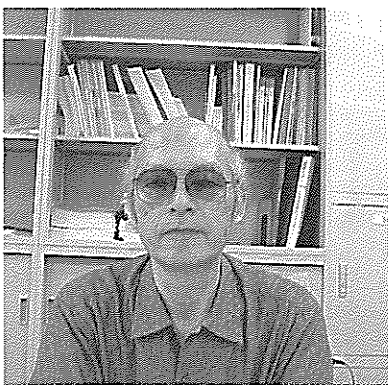
多言語・多文化教育研究センター長の高橋正明さんは、プロジェクトが始まっ

育に当たっている教師も、検証チームとして協力、そのほか多くのボランティアの協力も得て、教材づくりは昨年から実際に動き出した。

小学校一〜三年の漢字と
足し算・引き算の教材を
ウェブサイトにアップ

漢字の教材は、武蔵野市教育委員会や外国人児童生徒の教育支援に携わった経験のある野崎斐子さんを中心に、同大学の留学生日本語教育センターの年少者に対する日本語教育専門家がアドバイザーとして加わったチームにより、一年生から三年生の配当漢字を段階的に学ぶ「Meu Amigo Kanji」（漢字はともだち）がつくられた。

さらに、遊びながら漢字を覚えられるように、補助教材の「カルタ」もつくら



高橋正明さん（東京外大多言語・多文化教育研究センター長）

た経緯について、「公立小中学校の先生方やボランティアの方々には、市販の教材を加工したり、自分で教え方を考えたりと、さまざまに工夫をしながら日本語が分からない外国人の子どものための教育に当たっています。ところが、著作権の問題もあり、ある先生がせっかく良い教材を苦労してつくられても、その先生が他の学校へ異動してしまうとその場限りになってしまったりして、継続的な教材開発や誰でも使える教材はほとんどないというのが現状です。そのような中で、在日ブラジル人子弟教育支援の社会貢献活動を推進している三井物産と協働で教材作成のプロジェクトをスタートしました。当初は、高校進学の問題がある

れている。

算数の教材は、大蔵守久さん（波多野ファミリスクール理事・主管、二一ページからインタビュ어가掲載されている）の「足し算・引き算日本語クリアー」（凡人社）をもとに作成された。

どちらもイラストを多用し、ポルトガル語スタッフがポルトガル語訳やブラジルに関する情報に加え、日本語が分からない子どもたちへの配慮が行き届いた内容になっている。

また、算数教材については、教え方のポイントが詳しく書かれた指導者用のテキストもつくられている。

同センター教材開発チームで算数教材の開発を担当している吉田尚弘さんは、「大蔵先生につくっていただいた指導者用のテキストは、日本語指導をしたことのない方でも、これを読めば使えるような内容になっています。私たちは、日本

中学生向けの教材をつくらうと考えていましたが、センタースタッフと、三井物産の方々や外国人児童生徒の教育に長くかかわっている方々との話し合いの中で、基礎固めが重要ということで見解が一致し、まず小学校一年生から三年生向けの漢字と算数の教材を作成することになったのです」と話している。

教材作成チームとして、センター内に、高橋センター長を委員長とする運営委員会が結成され、外部協力者として、外国人児童生徒の教育の専門家もプロジェクトに参加。また、作成の過程で、日系ブラジル人が集住する地域から、群馬県太田市・大泉町、静岡県浜松市、長野県上田市で、実際に外国人児童生徒の教

とブラジルの計算方法の違いやブラジル人の子どもがつかまざるやうと思われるところを説明しました。例えば、ブラジルでは、「100」を「セン」というので、日本語の「千」と混同しやすいとか、ブラジルでは、繰り下がりのある引き算を勉強するときに、日本のように「10の固まり」をつくることをさほど意識しないなどの説明を付け加えています」と話す。

漢字担当スタッフの長崎清美さんは、「漢字圏でない国から来た子どもたちに



プロジェクトスタッフの吉田尚弘さんと長崎清美さん

日)で、ダウンロード数は約二万件にのぼり、実際に使用した人たちからの意見も寄せられている。

長崎さんは、「この教材で漢字学習が苦手な子どもたちが少しでも漢字を好きになってもらえたら嬉しいです。今後はこの教材で提示した漢字を一度はらして、例えば『教科書の提出順に沿った形での教材』、『抽象的な熟語を中心に学習する教材』といった具合に複数のパターンで教材を用意しようと考えています。また、現在教材活用例として『カルタ』の実践例をウェブ上でご紹介していますが、他にも教材の使い方や他の方々にも参考になるものを教えていただけたら、どんどんご紹介して、皆さんで共有できるようにしたいと思っています」と話している。また、吉田さんは、「皆様からのご質問には、ウェブサイトで答えていき、多い質問については、Q&Aといった形で掲載していくとともに、ご意見の中から大切なものについては、今後の教材づくりを生かしていきたいと思っています」と言う。

これからは、教材の多言語化と教師等のための研修会開催を

今の教材に加えて、算数の掛け算・割り算・分数、理科の教材づくりが予定さ

れている。また、在日ブラジル人児童むけ教材開発をきっかけに、センター独自の事業として、フリーピンとつながる子どもたちむけの教材作成も進行している。センター長の高橋さんは、「将来は、中学生むけの教材もつくればと思います。多言語化については、需要があれば他の言語でも作成していくつもりです。そこに、二六の言語と文化の専門家を抱える東京外国語大学でこのプロジェクトを進める意味があると思います。また、このプロジェクトは、教材づくりだけで終わることなく、『環境づくり』も進めていかないと意味がないと思っています。つまり、より多くの方々にこの教材を使っていたら、今後各地で、先生方やボランティアの方々のために研修会も開いていきたいと考えています」と、プロジェクトの今後について話している。

○教材のダウンロードは、東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターのホームページ内の「在日ブラジル人児童のための教材」から。URLは次のとおり。
http://www.tufs.ac.jp/common/mlmc/kyouzai/brazil/

日本に住む外国人の子どもたちの未来を拓くために

——波多野ファミリスクール理事・主管 大蔵守久さんに聞く

二〇年にわたり多国籍教室で日本語と教科を教える

——大蔵さんは、財団法人波多野ファミリスクール (<http://www.hatanoo.or.jp/>)で、長年外国人の子どもたちの教育に携わっていらっしやうたそうですね。

はい。この財団は、昭和三八年の設立当初から、「心身の健康と国際性をすべての人へ」というモットーで活動してきました。その事業のひとつとして、昭和五二年から平成一〇年三月まで、帰国した子どもたちが日本の学校にスムーズに適應できるように、集中して子どもたちをお預かりして、日本語ができるようになったら日本の学校に戻すという「国際学級」を開いていました。「国際学級」は、最初は日本人の帰国子女が主だったのですけれど、途中から日本語の分からない外国の子どもたちも受け入れるようになりまし。平成一〇年頃には、ほとんどが外国の子どもたちでした。二〇年間受けた外国の子どもの数は、二〇〇〇名、国籍は六九か国、言語は四九言語にもなります。

——日本語の指導が主だったのですか。日本語だけでなく、算数や数学、理科、社会など、教科の指導もしていました。日本語の分からない外国の子どもたちを

教える民間の専門機関がここだけだったので、小学生から中学生まで来ていました。特に後半は、外国で中学を卒業した子が多かったですね。日本の中学校には年齢の問題で入れませんし、かと言って高校にもすぐには入れないので、高校受験のための教科指導もしていたのです。

大切なのは、日本の学校に適應できる力を身につけてやること

——日本との学習のしかたの違いなどもあるのではないのでしょうか。

もちろんあります。一般論ですけども、漢字文化圏の国は、勉強の進め方や教科書が似ているという点で日本と共通したところがありますが、テストの答え方などを見ると、「おや?」と思わされることもありまし。

こんなことがありました。アメリカから来た子どもと台湾から来た子どもに、国語を教えていたときのことです。「キリンの首はなぜ長いか」という説明文を読ませて、「キリンの首はなぜ長いのでしょうか」という設問に答えさせたのですが、アメリカの子どもは、頭を抱えて考えているのですね。「本文の中に理由が書いてあるからそれを書けばいいんだよ」と言うと、「自分の学校では、本文はあくまで参考資料で、答えは自分で考

えて書きなさいと言われてきた。本文を書き写すだけなら意味がない」と言うのです。一方、台湾の子どもには、「この本文を全部暗記するのですか?」と、聞かれました。「僕のいた学校では、本文を全部暗記して、テストは、本文で抜けたところに、何があったかを思い出して書くことでした」と言うことでした。もちろんアメリカや台湾が全部そうというわけではないと思うのですが、そういった違いは確かにあるのです。

一クラス一四、五人いっぺんに教えて、そんな風に、学習のしかたも違いますが、日本語の力もばらばら。教科学習についても、本国でしっかりやって来た子もいれば、そうでもない子もいます。そんな中で、どの国の子にも興味を持って勉強してもらえようかという教える方や教材をつくりあげていかなければいけない。本当に子どもたちに鍛えられましたね。

——学校教育のあり方が国によってずいぶん違うのですか。

そうですね。世界中からいろんな文化を持った子どもたちが来て、日本という国も変わり、学校文化も変わっていくと思います。それは良いことだと思うのですが、日本に適應しないことには、その子の持っている良さを学校の中で出すこ

とはできないのです。その子が学校をやめてしまったりしたら、日本人の子どもにはない力を持っていても發揮することはできません。

日本の学校にきちんと適応できる能力を身につけてあげること。そこからだと思っんです。それができて初めて、外国の子どもたちの持っている良いものが、日本の子どもたちに影響を与えていくと思っんですね。

学校の教師や市民ボランティアたちに実践的な教材や指導法を伝える

——今は「国際学級」はないのですか。

文部省の委嘱が平成一〇年三月に終わりました。そこで終了しました。子どもたちの親の背景もさまざま、払える方にはもちろん授業料を払っていただいていたのですが、経済的に逼迫している方には無償でしたので、財団だけで続けることは困難だったので、教室が終わってから来年で一〇年になり、資金を確保してなんとか再開したいと考えています。

——現在は、二〇年間にわたって外国人の子どもたちに教えた経験を生かされて、教員研修や教材の作成などに活躍されていますね。

昭和六二年から文部省(当時)の教員研修の講師を始め、今も、国や各都道府

来て日本語が分からない間に勉強がずっと進んでしまった子どもが、非常に限られた日本語でも教科内容が理解できるようにするというものなのです。ですから、教科内容にしても日本語にしてもJSLの方がもうちょっと上のレベルになりますね。

——それで絵を多用して、見て理解できるようにしているのですか。

基礎の基礎をしっかりとおさえてあげることがねらいです。中学生でも、その辺が弱い子どもはたくさんいます。まずは一番基礎となるところをやらないと、いくら中学校の学習をしても空回りしてしまいますからね。

——この教材は一年生から三年生までの内容ですが、これから上の学年の内容の教材をつくる予定はあるのですか。



大蔵守久さん

県 学校の研修で講師を務めさせていただいています。最近では、外国人の子どもたちの支援に地域のボランティアの方々も活動されていますので、県や市の国際交流協会の依頼も多くなりました。

また、文部省の日本語のテキスト「日本語を学ぼう」の編集委員も務めていました。今は、文部科学省が平成一三年から進めているJSLカリキュラム(Japanese as a second language—日本語を母語としない子どもたちの学習支援のためのカリキュラム)づくりとその普及にもかかわっています。

——文化庁の「日本語教育研究協議会」

での講義の内容を拝見しました(平成一五年東京大会第四分科会「年少者の日本語学習支援について考える—授業のヒント」<http://www.bunka.go.jp/kokugof/jasen/1-4.html#top>)。大変具体的に授業をするときの心構えや指導方法を伝えていらっしゃいますね。

私は、明日からでもすぐ使えるようなノウハウをお話しようと思っかけています。学校の先生方もボランティアの方たちも、忙しい中で時間をやりくりしていただきますし、しかも、今までの学校教育で自分が受けたことのない教育を、手探り状態で教材もつくり、教え方も自分で考え出すというのはなかなか難しいものです。

この後、掛け算・割り算・分数の教材づくりを進めています。三年生から理科の学習が始まりますので、理科の教材もつくりたい。

ありとあらゆる方法を使って「分かる」喜びを知らせる

——この教材の使い方について、アドバイスをいただけますでしょうか。

まず、使ってくださいださる先生方に理解していただきたいのは、一番大切なのは、子どもに「分かる」ようにするということです。子どもたちにとっては、「分かる」ことが何よりの薬です。そうすれば学習に対しての意欲も出てきます。ですから、ありとあらゆる方法を使って、子どもたちに「分かった」という気持ちを持つようにしてあげられるのです。

その方法としては、まず、教える内容を厳選すること。限られた時間ですべてを教えようとするのは禁物です。

次に、知っている言葉に置き換えて説明すること。なるべく子どもが知っている生活会話レベルの日本語で説明します。例えば、私が教えたときの経験ですが、「たろうくん」と「じろうくん」が〇〇を「しました」という文章題で、この名前が、外国人の子どもたちにとってはまず難問なのです。日本人の子どもは「ああ、人の

ですから、先生方が目の前にいる子どもたちのために、自分でちょっとアレンジすれば使えるように、教材を提供し、自分の持っているノウハウをお伝えしていきたいと思っっているのです。

限られた日本語で理解できるように絵を多用した算数教材をつくる

——東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターの「在日ブラジル人児童むけ教材開発プロジェクト」で、ブラジル人児童むけの算数教材として、大蔵さんの「足し算・引き算日本語クリアー」(凡人社発行)が使用されていますね。

単元ごとの配列ではなく、足し算・引き算の理解を基礎から積み上げる方式で、それとともに教科に必要な日本語を学ぶというもので、JSLの教科書とも共通したところがあるように思います。

コンセプトとしては似たところがありますね。違いは、JSLの教科書は、ある程度日本語が話せて、教科についても基礎はできている子どもを対象に、そういう子どもが、日本の教科書とほぼ同じ内容について、教科書より少し易しい日本語で学んでいこうというものです。

私の教材はそこがちよっと違っっていて、海外で基礎的な学習経験をしっかりと積んでいない子ども、あるいは日本に

名前だ」とすぐに分かるけれども、外国の子どもは「たろう、なに?じろう、なに?」とそこつまずいて、考えている間に授業が先に進んでしまうのです。ですから、そんな場合は「わたしとあなた」と置き換えてあげるだけで、ずいぶん理解が楽になると思います。

それから、絵を使って、視覚に訴えることも大切です。

——大蔵さんの教材では、問題が分かりやすく、絵で図解されていますね。

子どもの持っている限られた日本語と学習経験で理解できるように、絵を使って、視覚に訴えるようにしてあるのです。教材の中の絵をなるべくうまく利用していただきたいと思っます。

それから、「分けて提示すること」。小さなステップを踏んで、きちんと一歩一歩理解させることです。

もうひとつ、「記憶の手助け」をすることも大切です。例えば、私は、そのときはやっているCMの替え歌をつくり、学習言語を覚えさせるようにしたりしました。それから、浜松の先生にうかがったのですが、カタカナが覚えられない子どもに、「ピカチュウ」のキャラクターの名前を使って教えたら、すぐに覚えたとのことです。目の前の子どもがどんなものに興味を持っているか、アン

テナを常に張っていれば、記憶の手助けとなる良い方法も見つかると思います。

——日本語と教科内容は並行して教えるといいいのですか。

まず、教科の内容を理解させてから、日本語を教えるようにしてほしいと思います。教科内容が分かった上で、授業で使われる日本語を教えるのです。指導者用教材には、「のこり」「なんこ」「おおい」「すくない」「より」など、必要な学習言語がポイントとして書かれています。ただし、日本語指導は、授業の最後になります。途中で日本語の指導を入れてしまうと、子どもたちが混乱してしまいますので、日本語の意味の説明はしてもそれ以上はしない。内容が分かったところで、頭を切り替えて、「この勉強はもう分かったね。じゃあ、次は日本語だよ」と、日本語の習得のための勉強に没頭できる態勢をつくってあげることが大事なんです。そこで、授業で使われるような、ワンランク上の日本語を教えてあげてください。

子どもには、最初から、話させる必要はありません。まずインプットして、十分にしゃくする時間を与えることです。子どもがだまって考えていると、つい不安になって、次々と言い方を変えて説明してしまったりしがちですが、子ども

もはそれだけ手にした日本語が多くなつて、混乱してしまいます。最初に与えた四つか五つの簡単な日本語で、たっぷり考える時間を与えることが大切です。

——学校の先生方と地域のボランティアの方々に、使い方に違いはありますか。

学校の先生方は、教科内容については理解されているので、内容をアレンジして、後は日本語の教え方に注意していただけだと思います。

ボランティアの方々、教科については専門ではないので、いろいろ難しいことはあると思います。

私のテキストは、順を追って使っていくとだくと分かるようになっていきますので、手を加えないで、そっくりそのまま使っていた方がいいです。

また、子どもと一緒に学んでいく姿勢が大事だと思います。教科の専門ではないからこそ、子どもと同じ視点に立って、「ここは分からないな」とか「ここはもう一度やった方がいいかな」とか考えられると思いますので、教科の先生ではないからこそ気づく良い点を子どものために使ってあげてほしいですね。

システムとしての「つながり」と
未来に続く道としての「つながり」を

——これから、外国人の子どものための教

育に、どのようなことが必要だと思われるですか。

「つながり」が大切だと思います。

ひとつには、例えば、外国人の子どもが、ある地域のA小学校から、他の地域のB小学校やC小学校に転校したとき、同じシステムで日本語や教科指導のフォローができるような、システムとしての「つながり」をつくりあげる必要があると思います。

もうひとつは、未来への道筋としての「つながり」です。

日本に来た外国の子どもたちは、特に中学生くらいだと、在籍学級でしている勉強と、自分が日本語学級でしている勉強が、あまりにレベルが違うので、高校に入れるんだろうか、日本で大人になつてちゃんと生活していけるのだろうか、と、すごく不安なんです。

その不安を解消して、夢や希望を持って勉強を続けられるように、「君たちの先輩も来たときは大変だったけれど、あせらず勉強を続けて、今は高校や大学に入り、卒業して働いているんだよ。ちゃんとステップを踏んで勉強すれば、未来が開けるんだよ」という道筋を、子どもたちに見えるようにしてあげられると思います。

（聞き手…「国際人流」編集部）